

山科本願寺跡の発掘調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

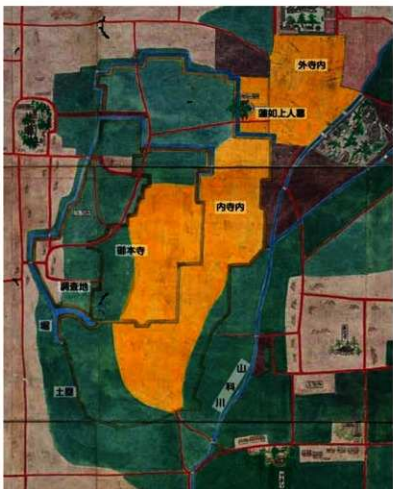
今年、1998年は本願寺八世蓮如上人の500回忌にあたり、西本願寺・東本願寺をはじめ各地で様々な行事が行なわれています。その蓮如上人が文明十年(1478)に築いた山科本願寺跡で、昨年発掘調査を実施しました。

山科本願寺は堂舎が建ち並ぶ「御本寺」、家臣や僧侶が生活する「内寺内」、寺に関わる職人・商人が生活する「外寺内」の三つの郭から構成され、寺域は南北1km、東西0.8kmにおよんだといわれています。また、周囲には土を高く積み上げた土塁や堀をめぐる防禦施設も備えていました。その繁栄ぶりは「仏国のごとし」といわれ、全国から訪れる大勢の信者でにぎわっていたと想像できます。

しかし、造営から82年後の天文元年(1532)、管領細川晴元の率いる法華宗徒・延暦寺宗徒・近江六角氏の連合軍の攻撃によって、山科本願寺は焼け落ちてしまい、現在では土塁や堀の一部が残っているにすぎません(写真1)。

今回の調査地点は御本寺の南西部に位置し、現在でも寺域を囲っていた土塁の高まりや堀の痕跡が残る部分です。調査の結果、寺内の建物や井戸・溝などの遺構が見つかり、堀の規模や土塁の構造なども明らかになりました。

建物跡は2棟確認しました。建



古絵図にみる山科本願寺(京都府立洛東高等学校蔵 一部改編)



写真1 調査地付近 中央に調査地、帯状の茂みは現存する土塁(南から)

物1は南北に細長く、北半部に備前焼の大甕8個が埋められています。甕の中身は分かりませんが、

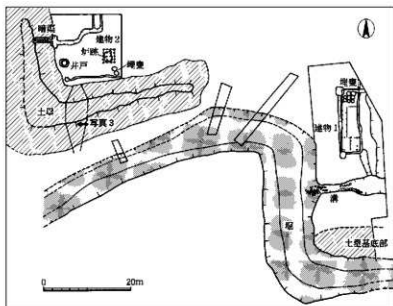
おそらく米などの穀類、油、酒といったものを蓄えていたのでしょう。一方、建物2は伊跡をとまな

ていました。床面は赤く焼け、釘などの鉄や銅製品が多く出土していることから、ここで鍛冶を行っていた可能性があります。こうした建物の性格から、いわゆる境内にあたる御本寺内で、貯蔵や生産なども行っていたことがわかりました。いずれの建物も焼土で埋まり、焼けた土器や瓦が多く出土したことから、天文元年の焼き討ちの際に焼け落ちたものと考えられます。

また、排水のための溝や暗渠も確認しました。西側土塁の下の暗渠は石を組んで作られており、現在まで空洞となっており残っていました(写真2)。こうした施設により、排水はすべて周囲をめぐる堀に流れるように築造され、寺の造営はきわめて計画的に行なわれたことがわかりました。

今回の調査で堀は幅約12m、深さ3.7mもある巨大な部分もあったことを確認し、堀を掘った土を積み上げた土塁と共に、防御施設としての役割も十分に果たしていたことがうかがわれます。土塁は調査地点では高さ5~6m、基底部の幅約15mの規模で、両斜面はかなりの傾斜を持っていました。断面を観察すると効率的に土を積み上げ、版築状に造られたことがわかります(写真3)。

今回は広大な寺域を持った山科本願寺のごく一部の調査でしたが、多くの貴重な資料を得ることができました。今後調査が進めば、御本寺内の堂舎の位置や規模、寺内町の様子など、実態がより明らかになるでしょう。(近藤 知子)



現存する土塁と堀、および遺構配置図



写真2 土塁下に作られた石積み暗渠(北東から)



写真3 土塁の断面 人物と比較して土塁の大きさがよくわかる(東から)